第三講『住吉物語』　中央大学

次の文章は『住吉物語』の一節で、都から住吉の浜へと追いやられた姫君を、少将が探して歩く場面である。これを読んで後の問に答えなさい。

さらぬだに、旅の空は物あはれなるに、夕波千鳥あはれに鳴き渡りて、岸の松風物寂しき空に、箏（しやう）の琴の音ほのかに聞こえけり。その声、盤渉調（ばんしきてう）に調べて、けだかく澄みわたりけり。「(1)あなゆゆしの、人のしわざにはよも」などと思ひながら、その音に誘はれて、何となく立ち寄りて聞けば、釣殿の西面に、若き声二、三人がほどしけり。琴かき鳴らし、「松風、波の音も(2)なつかしく、あはれ、都の人にかかる所を見せばや」などと語らひつつ、「秋の夕べはあはれなるに」など言ひて、何となき古歌をながめけるを、侍従に聞きなして、あなあさましと、胸うち騒ぎ、心をとどめ聞きたまへば、いま少し忍びたる声して、

(3)尋ぬべき人もなぎさの住の江にたれ松風の絶えず吹くらん

とながめ(4)たまふを、聞きたまへば、姫君の御声と聞きなして、「あなゆゆし、(5)仏の御しるしはあらたなる御ことにて」

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

とうれしくて、簀子（すのこ）に立ち寄りてたたけば、侍従、「あやし、たれなるらん」とのぞけば、寄りかかりたる姿の、夜目にもしるくて、「(6)あさましや、少将殿のおはしたるぞや。いかが」と申せば、姫君、「あはれにもおはしたるにこそ。さりながら、人聞きあしかりなん。我はなしと申し聞こえよ」とあれば、侍従出（い）で会ひて、「こはいかに、あやしの所までおぼし立たせ(7)たまへるぞや。そののち、姫君を失ひまゐらせて、慰みがたさに、かくまよひはべるなり。見まゐらせさぶらへば、いよいよ昔恋しくこそ」とて泣きはべる。

「侍従の君のことをこそしのびしに、恨めしくものたまふものかな。(8)御声までうけたまはりさぶらふに。おぼろけにてや、尋ね来たりつる。かく参りたるをば、あやしき武士（もののふ）なりとも、あはれと思はぬ人やさぶらはん。よしよし、さらば帰りなん」とて、直衣（なほし）の袖（そで）を顔に押しあてて、「憂きもつらきも、知らせたまはぬにこそ」とて嘆きはべれば、侍従ことわりと思ひて、「さるにても、足やすめさせたまへ。都のことの恋しくはべるに」とて、尼君に、このよしを言ひあはすれば、「ありがたき御ことにこそ。たれたれも、あはれを知りたまへかし。まづこれへ、入らせ(9)たまふべきよし申せ」とて、侍従、「馴（な）れ馴れしくなめげなれども、その昔のゆかりなれば、さのみこそ。疾（と）く立ち入らせたまへ」と申しければ、少将入りた

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

まひぬ。

（『住吉物語』による）

注
盤渉調……雅楽の調子の名。
ながめける……和歌を詠じた。
侍従……姫君の付き人。
尼君……姫君・侍従の居所の主。

問一　傍線（1）「あなゆゆしの、人のしわざにはよも」、（2）「なつかしく」、（5）「仏の御しるしはあらたなる御ことにて」、（6）「あさましや」の解釈としてもっとも適当なものをそれぞれA〜Dの中から選べ。

（1）あなゆゆしの、人のしわざにはよも
A　ああ、美しい音色だ。この人の技術は信じられないほど優れている。
B　ああ、けたたましい音色だ。これは人間の耐えられるものではない。
C　ああ、不吉な音色だ。これは人間の奏でている音色だとは思えない。
D　ああ、優美な音色だ。あの方がお弾きになっている音色に違いない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

（2）なつかしく
A　馴れ馴れしくて
B　昔が思い出されて
C　上品な美しさで
D　慕わしくて

（5）仏の御しるしはあらたなる御ことにて
A　御仏のお導きがまたあったことで
B　御仏の霊験はあらたかなことで
C　御仏の御利益は初めて体験したことで
D　御仏の仰せがあるとはもったいないことで

（6）あさましや
A　驚いたことだ
B　あきれたことだ
C　品性がいやしいことだ
D　喜ばしいことだ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　次のア～オは傍線（3）の和歌に関する説明である。適当なものに対してはA、不適当なものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　この歌は、私を訪ねてきてくれる人などいないだろうという姫君の寂しさを述べたものである。
イ　この歌は、私が思う人はいったい誰のことを恋しがっているのだろうという、姫君の落胆を述べたものである。
ウ　この歌は、ふるさとである住吉に訪ねたい友人がいない、姫君の悲しみを述べたものである。
エ　この歌には、「なぎさ」と「無き」、「松」と「待つ」などの掛詞の技法が用いられている。
オ　この歌では、「松風の」が「絶え」にかかる枕詞として用いられている。

ア＝　　イ＝　　ウ＝　　エ＝　　オ＝

問三　傍線（4）「たまふ」、（7）「たまへ」、（9）「たまふ」は、誰に対する敬意をあらわしたものか。もっとも適当なものをそれぞれ次の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し用いてもよい。

A　姫君　　B　侍従　　C　少将　　D　尼君

（4）＝　　（7）＝　　（9）＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　傍線（8）「御声までうけたまはりさぶらふに」の意味としてもっとも適当なものを次の中から選べ。

A　侍従さまの御声までこうしてお聞き申し上げましたのに
B　姫君の御声だけを聞きたくて参りましたのに
C　侍従さまの御声だけを聞きたくて参りましたのに
D　姫君の御声まで確かに聞こえましたのに
E　侍従さまの御声まで確かに聞こえましたのに

問五　本文の内容と合致するものを次の中から一つ選べ。

A　侍従は、琴や松風、波の音が大変素晴らしいので、是非都の人たちに見せたり聞かせたりしようと思った。
B　侍従は、姫君を隠した方がよいと判断して、姫君はもう亡くなってしまったと少将に嘘(うそ)をついた。
C　姫君は、悪いうわさが立ってしまったら良くないと思って、はじめは少将に会おうとしなかった。
D　少将は、訪ねて来たのがいやしい武士だから差別をするのですか、と侍従に嘆いてみせた。
E　尼君は、少将も侍従も姫君もとても情け深いことですね、と感心して、少将を招き入れるように指示した。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第三講　復習問題

①
「ゆかり」の意味として、最も適当なものを次の中から選べ。

イ　ついで　　ロ　偶然　　ハ　便り　　ニ　縁故

②
「あやしのいほり」の解釈として、最も適当なものを次の中から選べ。

イ　驚くほど立派な隠居所　　ロ　おごそかな山荘　　ハ　人目につかない隠れ家　　ニ　粗末な仮小屋

③
「跡をだに形見に見むと思ふ」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から選べ。

イ　屋敷の様子だけでも見て、資盛をしのぶよすがとしようということ。
ロ　屋敷の様子を見て、ある聖の手に渡ってしまったことを実感したこと。
ハ　屋敷の様子を見て、資盛と別れたときのことを思い出したということ。
ニ　屋敷を訪れて、資盛がまだ生きているような気がしていること。
ホ　屋敷を訪れて、ある聖の手に渡ったときのことを思い出したこと。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④「ありしよのうらみもきえてしらゆきのふりにしひとぞさらにこひしき」の歌に用いられている掛詞を、漢字二つの組み合わせで示すとしたら、次の中のどれが最も適当か選べ。

イ「恨」と「裏」
ロ「白」と「知」
ハ「降」と「古」

⑤次の傍線部1〜3の文法的説明として、最も適当なものを後の中からそれぞれ選べ。

読経してあ[1]なり。
この人、見しやうなれば、あはれ[2]なるを、…
「年ごろに[3]なり侍りぬ」と奏す。

イ　断定の助動詞　　ロ　形容動詞の語尾　　ハ　伝聞の助動詞
ニ　推定の助動詞　　ホ　ラ行四段の動詞

1＝　　2＝　　3＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第三講】

〈模範解答〉

問一　⑴A　⑵D　⑸B　⑹A

問二　ア　A　イ　B　ウ　B　エ　A　オ　B

問三　⑷A　⑺C　⑼C

問四　D

問五　C

〈現代語訳〉

ただでさえ、旅の心はもの悲しいのに、夕方にうち寄せる波の上に千鳥の鳴き声があたり一面に悲しげに聞こえ、岸の松を吹く風も身にしみて寂しい中に、箏の琴の音がかすかに聞こえてきた。その音色は、盤渉調の音律に合わせて、気高くあたり一面に澄んだ音色で響いた。「ああ、美しい音色だ。この人の技術は信じられないほど優れている」などと（少将は）思いながら、その音色に誘われて、何となく立ち寄って聞くと、釣殿の西側に、二、三人ほどの若い人の声がした。琴をかき鳴らし、「松風や、波の音も慕わしくて、ああ、都の人にこのような（趣きのある）所を見せたいものです」などと語りながら、「秋の夕べはしみじみ物悲しいので」などと言って、さりげない古歌を詠み上げた声を、侍従の声だと聞き当てて、「ああ驚いた」と、胸が騒ぎ、心を静めてお聞きになると、それよりもう少し抑えた声で、

　尋ぬべき…＝訪ねてくるはずの人も無い、この渚の住の江で、いったい誰を待つといって松風が絶えず吹いているのでしょうか。

と（姫君が）詠じなさるのを、（少将が）お聞きになると、姫君のお声だと聞き当てて、「ああすばらしい、御仏の霊験はあらたかなことで（ある）」と嬉しく思って、簀子の縁に近づいて戸を叩くと、侍従は、「おかしい、誰でしょうか」と言ってのぞいて

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

みると、（縁に）寄りかかっている姿は、夜目にもはっきり（少将と）わかって、「驚いたことだ、少将様がいらっしゃったのですよ。どう（いたしましょうか）」と申し上げたところ、姫君は、「（少将様は）嬉しくもおいで下さったのですね。しかしながら、他人がこのことを聞くと具合が悪いに違いない。私はいないと申し上げなさい」とおっしゃるので、侍従は出て（少将に）会って、「これはどうして、このような辺鄙な所まで訪ねようと思い立ちなさったのですか。あの後、姫君とお別れ申し上げて、心の慰めようもないので、このようにさまよっているのです。（少将様を）拝見いたしますと、一段と昔が恋しく（しのばれます）」と言って泣きます。

（少将は）「侍従の君のことを懐かしく思っていたのに、恨めしくも（嘘を）おっしゃるのですね。姫君の御声まで確かに聞こえましたのに。いい加減な気持ちで、訪ねてきたのではないのに。このように参上したものを、下賤な武士であっても、しみじみと思わない人がいましょうか。よいよい、では帰りましょう」と言って、直衣の袖を顔に押し当てて、「辛いこともいやなことも、おわかりにならないのでしょう」と言って嘆きますので、侍従はもっともだと思って、「それはともかく、足をお休め下さい。都のことも恋しく思われますので」と言って、尼君に、このことを相談すると、「めったにないありがたいことです。どなたも、物事の情けというものをおわかりなさいませ。まずこちらへ、お入りなさるように（少将様に）申し上げなさい」と言って、（そこで）侍従は、「慣れ慣れしく無礼なようですが、昔のご縁もあることですので、そのままで。早く中にお立ち入り下さいませ」と申し上げたので、少将はお入りになった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔重要単語〕

○ゆゆし…①**おそれ多く慎まれる**。②忌まわしい。**不吉だ**。③たいそうである。④**すばらしい**。⑤ひどい。
⑥気味が悪い。⑦勇敢だ。

○ながむ【眺む】…①**もの思いにふける**。②見渡す。じっと遠くを見る。
【詠む】…**詩歌を口ずさむ**。

○あさまし…①**驚きあきれる**。②嘆かわしい。③話にならない。④程度がはなはだしい。

○しるし【徴・験】…①**前兆**。②**霊験**。**ききめ**。
【標・印・証】…①目印。②証拠。③合図。
【著し】…①**きわだっている**。②予想通りだ。

○あやし…①**不思議だ**。②**粗末だ**。③**身分が低い**。

○しのぶ【忍ぶ】…①たえる。②**秘密にする**。③**がまんする**。

○おぼろけなり…①**ふつう**。②**格別だ**。

○うし【憂し】…①**つらい**。②**いやだ**。③にくい。④つれない。

○ありがたし【在り難し】…①**めったにない**。②**すぐれている**。③**生きながらえにくい**。④尊い。

○なめげなり…**無礼だ**。**失礼だ**。

○ゆかり【縁】…**血縁**。親戚。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第三講　解答解説

〔解説〕

① 「ゆかり」は重要単語で、「血縁・親戚」の意味。よって、正解はニ。

② 「あやし」も重要単語で、「不思議だ・粗末だ・身分が低い」の意味。よって、正解はニ。

③ 「だに」の下に意志、仮定、願望、命令の表現があれば、その「だに」は「最小限の限定（せめて～だけでも）」。「見むと思ふ」の「む」は「と」の上にあり、「～（し）よう」と訳しておかしくないので「意志」。よって、この「だに」は「限定」となる。「だけでも」をきちんと訳出しているイが正解。ちなみに、「だに」のもう一つの意味は、「類推（～さえ）」。選択肢を確認すると、「～さえ」と訳しているものもなく、「だに」の訳出をしているものは、結局イのみである。

④ 「掛詞」は「不自然な平仮名」になっている場合が多いが、本設問のように全部が平仮名であれば、掛詞として「よくあるパターン」に気をつけながら、意味を考える。上からのつながり、下へのつながりで考えていくと、「しらゆきのふりにしひと」の部分が、「白雪の『降り』」と「『古り』にし人」と掛詞であることに気付ける。よって、正解はハ。中央大は和歌が頻出であるので、和歌の修辞技法をきちんと学習しておくこと。（「センター対策講座」の第二講が「和歌特集」なので、和歌が苦手な人は参考にしてください。）

⑤ 「なり」の識別。1は「あなり」なので、「伝聞・推定」の「なり」。選択肢が「伝聞」と「推定」に分かれているので、文脈判断がいるが、本設問では「読経して」と音がはっきりわかるものなので「推定」の「なり」とする。よって、正解はニ。中央大は、このように選択肢が「伝聞」と「推定」に分かれている場合が多いので、「音」情報があるものなのか、人の噂

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

話などで伝え聞いたものなのか、文脈判断もお忘れなく。２は「あはれなり」で一語の形容動詞。よって、正解はロ。３は上の文字が「に」で「なる」と訳せるので、動詞。よって、正解はホ。「なり」の識別は、二〇一二、二〇一三年と二年連続で出題されていた。識別問題で点を落とさないように、識別の仕方をきちんと頭に入れておきましょう。

〔解答〕

①　ニ　②　ニ　③　イ　④　ハ　⑤　１　ニ　２　ロ　３　ホ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。